



大和中だより

【学校教育目標】

意志と努力で輝く大和中生
元気なあいさつ きれいな学校
見通しある学習 打ち込む活動
みんなで協力 思いやる心

和光市立大和中学校 〒351-0112 埼玉県和光市丸山台2-8-8
Tel 048-461-2143 メールアドレス yamato@wako-city.ed.jp
ホームページ <http://yamato.wako-city.ed.jp/>

「3月号」

～令和4年3月1日発行～

「負け」には、「勝ち」以上に学びや美しさがある

校長 金子 文春

2週間に渡って行われた「北京五輪」が先月20日に閉幕しました。多くの方がテレビの前で応援したことでしょう。私もその一人です。雪や氷の上を滑る競技が多い冬季五輪。その特性から、わずかなミスや失敗が勝敗を分けてしまいます。羽生結弦選手（男子フィギュアスケート）のショートプログラム、高木菜那選手（女子スピードスケート）の残り一周、藤沢五月選手（女子カーリング）のラストショット……。大事な場面で思うようにいかなかった選手たちの姿を見ながら、「この人は今どんな気持ちなのだろう？」と思わず想像してしまいます。

冬季五輪の記憶として、忘れることのできない選手がいます。元男子スキージャンプの原田雅彦選手（今大会の日本選手団総監督）です。1994年リレハンメル五輪の男子団体。首位を独走していた日本は、最終ジャンパーの彼が普段どおりの記録を出せば金メダル獲得でした。勝負はすでに決まっていたと誰もが思っていた直後に、五輪の魔物が彼を襲いました。まさかの大失敗ジャンプ。着地の瞬間、彼は頭を抱え崩れ落ち、うずくまったまま動けませんでした。

自国開催となった1998年長野五輪の男子団体。原田選手が帰ってきました。この4年間、多くの誹謗と中傷、出口の見えないスランプ、有望な若手選手からの突き上げなど、彼の苦悩と葛藤はすさまじいものであったそうです。そんな彼の4年後、大一番での最終2回目は、参加選手の中でその日の最長となるスーパージャンプ！一時は4位だった日本が大逆転で金メダルを獲得する原動力となりました。試合後の彼は競技直前の決意を「自分のジャンプで1mでも遠くへ。足が折れてもいい。」と語っていました。4年前の「負け」を乗り越え、決死の覚悟で「勝ち」をつかんだ彼のジャンプは、今でも多くの人々の心に強く焼き付いています。

「負け」は、「勝ち」以上にその人に多くの学びや教訓を与えてくれます。また、そこであきらめずに這い上がり、乗り越えた人の姿は美しく、感動を与えてくれるように思います。このことは、スポーツ選手だけでなく、私たち一人ひとりにも当てはまるのではないのでしょうか。一生懸命に打ち込んでいる人を見ると、涙が込み上げてくるのはなぜでしょう。きっと、立ち上がろうとする人の姿やドラマに、自分自身を重ねるからです。

今回の北京五輪で、私たちは選手たちが思うようにいかない不運や失敗、「負け」を目撃しました。それらをよく覚えておくと、次回2026年、イタリアでの五輪が何倍も楽しめ、感動できるはずです。

